



「都への路」と書いて「みやこじ」。一年前の町村合併まで、都路村と呼ばれていた山間地域に、診療所があります。赴任して四年。東北の田舎町には似合わぬこの風雅な名前がとても気に入っています。診療所を訪れるのはほとんどが高齢者です。七十歳と聞いても、まだまだこれからという感覚に私もすっかり慣れてしまいました。

「本当に大丈夫」

「先生、(わしの身体)大丈夫かね?」「大丈夫のようですよ」「ならよかった、また働けるかね」。外来で聴診を終えると、毎回のよう交わす患者さんとのやりとりです。診察だ

地域の一人々の健康に責任

けで判断するのは難しいと思いつつ、変わらない様子であるの
を確認すると、私も何だかホッ
とします。一方で、大丈夫と請
け合った後に、「本当に大丈夫
かな。大丈夫って何が?」とい

う思いも頭をかすめます。一人の患者さんの健康に責任を感じる瞬間です。

小さな地域・医療圏にいると、一人の患者さんにごんや脳梗塞(こうそく)などの重篤な疾患が発生した場合、家族にも影響が及び、生活や健康にも変化が生じてくるのをしばしば目の当たりにします。胃かいようやインフルエンザなど比較的軽微な疾患でも同じです。こうしたことを、ここの一年折に触れて感じるようになりました。

遠く感じる転送

診療所のある都路は東北新幹線の停車駅がある郡山市から車で一時間と少しです。週に一回は郡山市内の病院へ研修に通っている自分としては、ここは本当にへき地なのかなと感じることもあります。事実、自分で運

転できる若者の多くは、郡山市や付近の町に仕事や買い物に行き、通院もしています。

ところが、いざ救急患者が発生して脳出血や心筋梗塞の患者さんを転送するとなると、救急車でも約一時間かかる道のりは非常に遠く感じられます。また、県内でも雪の多い会津地方と比べると、都路の積雪量はかなり少ないのですが、家で肺炎をこじらせた年配の患者さんが、「雪で出て来られなかった」と答えます。こんな時、ここはへき地なのだと感じます。

ただ、大切なことはへき地かどうかということではなく、少しでも地域に住む人々が健康に(疾患を持っていない健康という意味ではなく、疾病や障害があってもなお暮らせるように)という目標を持ち続けることかもしれないと思う今日このごろです。最後に失敗を繰り返しながらも温かく見守ってくださいている地域の人々に、紙面を借りて感謝の気持ち伝えたいと思います。(次回予定は岐阜県)

25期生2002年卒

たぶちともこ
田淵 智子



数年前から始まった都路の灯まつり。幻想的な雰囲気にも包まれた

みやこじ診療所

【私の勤務地】都路町は古くは内陸(都)への商取引の途中の町ということで、この名前が付いたといわれる。人口約3000人で、農業・林業・畜産に従事する人が多い。都路に新イベントをつくらうと、官民の有志で「灯(ひ)まつり」が行われるなど活性化に力を入れている。診療所は医師2人、看護師9人。